

文字表記と小さな政治、大きな政治

独特の文字表記の仕方が民族集団のアイデンティティの恰好の文化表象となり、それをめぐって微妙な葛藤や対立が起きる事は決して珍しくない。今回は、ナンディとキプシギスの間に見られたこの種の問題の展開を具体的に考察した。両民族は、カレンジンと呼ばれ、現在ケニアの国家政治の中核にいる民族群中の二大勢力である。和解の過程で、両者が総称としてのカレンジンという新たな文化表象を作り出す事がなかったら、ケニアの現代政治の展開は余程違ったものになっていただろう。

名前の文字表記をめぐるこうした事情は、民族間のパワー・ポリティックスに限らず、個人の間にも見られる。人類学が扱う「政治」とはむしろそうしたミクロ・ポリティックス、つまり個人や集団間の利害の対立とその調整に関する諸々の事柄である。そして、二つの「政治」は相互に浸透し、通底し合っている。

■キクユ人とギクユ人

ケニア最大の人口を誇るギクユ (Gikuyu) 人は、最近まで、慣行的にキクユ (Kikuyu) 人と表記されていた。だが、実際の発音がギクユだという論拠から、彼ら自身、ギクユ人という表記を求めて事あるごとに発言を続けて来た。そして、今やギクユの表記が一般化しつつある。

ケニアでは、民族名の表記を決めたのは植民者である英国人だ。そればかりか、離合集散して止まない多様な人間集団を分類し、名付け、民族として固定し、領土を割り当てて行政地域を設定し、その上に中央集権的な官僚機構を被せて統治し、支配し、搾取したのである。つまり、英国人は一方的に「意味する者」であり、アフリカ人は一方的に「意味される者」だった。そして、その根拠は「科学的な」判断にあるとされた。科学とは彼らを意味付ける西欧人の論

法であり、その文化表象でもある。だから、ギクユ人が自らの呼称をギクユ人であると主張する根拠は、必ずしも言語の科学たる言語学にあるわけではない。それが彼らの感じ方であり、それを実感として知っているのは自分たちだけだという主張を正しく受け止める必要がある。

■キプシギス人かキプシクス人か

アナログで普遍的な音声とデジタルで弁別的な音素を概念として区別する言語学の方法論は、科学的ではあっても、言葉の実際の使い手を常に納得させ得る論理であるわけではない。

さて、日本語では音素として弁別されていないgの音と鼻に抜けるng'の音の区別が大きな問題となった事がある。正田美智子さんが皇太子の婚約者として初めて記者会見した時の事だ。民俗学者池田弥三郎氏は、美しく気品にあふれる完璧なスピーチだったが、玉に傷はng'の音が欠けていた事だと評した。それから2・3カ月後に彼女が再度記者会見した際には、gとng'の音を正確に使い分けていた。骨身を削る精進があったに違いない。同様に、意識的になれば日本人でもlとrを区別できる。

ところで、キプシギス人は、有声音と無声音を音素として区別していないのだから、言語学の慣行に従えばKipsikisと表記するのが妥当だという事になる。だが彼らは、KipsigisであってKipsikisではないという。ただし、それは彼らがgとkの音の特性を知ったうえで実際の音を吟味してgだと判定した事を意味しない。ここでは、彼ら自身の実感すら問題ではない。経緯はともかく、Kipsigisが表記として既に定着しているのであり、今更Kipsikisにすべきだという西欧の科学の論理を受け入れる理由など見つからないのだ。今や彼らは、植民地特代と異なり、いかなる論理によっても一方的に意味づけ

られる存在ではないのだから。

■Bzjxxiiwepさん？

何もアフリカに限った事ではない。英国自体の内部にも、とてもよく似た事情がある。マークトウェインは、次のように書いている。「名前ってのは、必ず見かけ通りってわけじゃないんだ。ウェールズのごくありふれたBzjxxiiwepって名前は、ジャクソンと発音するのさ」。

Walesは、現代英語のforeignerに当たる古代英語のWéalesを語源とする。ウェールズ人は、6-7世紀頃アングロ・サクソン人との打ち続く戦いで追い詰められ、オフアの防壁(offa's dyke)によって現住地へと囲い込まれた。その結果、今でも固有の言語と文化を維持し、独自の民族としての意識を持続している。Jacksonを現在でもBzjxxiiwepと綴るウェールズの人々には、Gikuyuの綴りを主張するギクユの人々や、Kipsigisの表記を譲らないキプシギスの人々に通じる心情を読み取る事ができるだろう。

■父と息子

ナイロビで日本学術振興会の駐在員をしていた十年余り前の事である。或る日、日本人の若い人類学者を彼のために予約しておいたホテルまで車で送り届けた。彼の父君は高名な人類学者だった。受付係は、私が予約した綴り通りに彼の苗字を声に出して本人の確認をした。すると、思いがけない事に、彼は呼ばれた名前の誤りを咎め、tをdに——つまり無声音を有声音に——改めて発音させたのだった。

怪訝に思った私は、事務所に戻ると相棒に尋ねてみた。相棒は微笑んで、「偉大な親父さんをもった息子って事ですよ」と答えた。そして、彼の高名な父君も、名のある画家だった父親にその昔反発して、姓の中に含まれるdの音をtに呼び変えたのだと説明してくれた。

私は姓をKonmaではなくKommaとアルファベット表記している。凡庸な父親の凡庸な息子は、父に倣っても少しも疑問を感じなかったのだった。

■文字と政治

上の場合は、苗字の漢字表記をそのままにして、読みの一部を無声音から有声音(ならびにその逆)へと変えたやや珍しい事例である。一方、音を変えずに、同じ漢字の異体字を使って差異を主張する例は少なくない。例えば、私が調査した国東半島のある集落には、吉武という苗字の同族団が二つあった。その一方は口に土を乗せた字体の吉を用いて武士の出であると言い、口に土を乗せた字体を使うもう一方の同族団との差異を強調する伝説を伝えていた。

もっと一般的なのは、旧字体によって独自性を主張する事である。最近、この傾向はとみに著しい。古い疲れた私の目には細部も判別できず、まるで書けない旧字が多い。どなたにも、新字体で宛て名を書くのは悪意のゆえならず、ただ単に無知のせいだにご承知頂きたい。

思い出すのは、タイタ・トウェット氏の事だ——第40回(98年4月号)参照。彼は、ケニアの二代目大統領ダニエル・アラップ・モイ(現職)と長くライバル関係にあった、高名なキプシギス人政治家である。彼はたたき上げのモイとは違い、カレンジンで最初のマケレレ大学(当時は高校)卒業者という超エリートだった。名誉博士号をもつカレンジンきっての、そして恐らく唯一の言語学者でもある。だが、終始奇矯なほどに過激な民族主義者であり続けたトウェットは、庶民的なモイの現実主義の前にやがて敗北した。

彼は、その後Taita Towetという名前の通常の表記を止め、Taaitta Towettの綴りを発明する。希有な言語学者だと誇示する作戦は裏目に出た。この表記は人々の心の琴線に触れず、彼の奇矯さだけを際立たせたのだ。文字表記は、往々有効な政治的な手段となる。だが、西欧の科学である言語学の難解な真理は、人々の素朴な論理を掬い取りはしなかった。人々を動かすのは、真理などではなく、常に意味なのである。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)